

# 平成 27 年度水産研究成果情報

課題名:サルボウの輪作の効果について

## [背景・ねらい]

サルボウは有明海佐賀県海域における重なる二枚貝で、夏場の主な漁獲対象種の一つである。近年の漁獲量は年により変動が大きく1千~8千トンで推移しており、安定生産が求められている。

このような中、図1のように毎年計画的に輪作を行い、5~6月の漁期盛期に高い頻度で操業を行う漁業者グループがあり、通常の養殖業者に比べてサルボウの漁獲量が安定している。そこで、採苗後2年目のこれら取組を実施している漁場と通常の操業を行っている漁場について漁期直前のサルボウの生息状況を比較した。

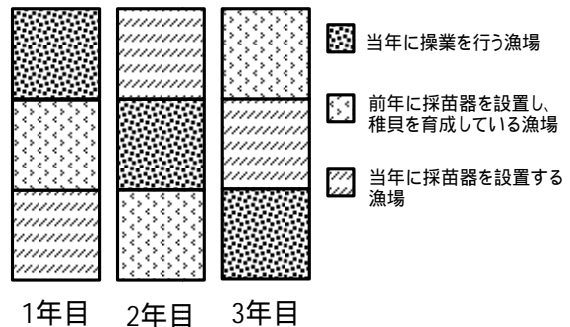


図1 輪作のイメージ図

## [成果]

調査は、図2に示す地点で平成28年2月に実施した。調査地点は、平成28年度に操業を行う漁場のうち、輪作等を実施している漁場を試験区、通常操業の漁場を対照区とした。検体の採取は、通常サルボウの漁獲に用いるジョレンを使用し、採捕重量に対するジョレンの曳行面積から1m<sup>2</sup>当りの生息密度を求め比較を行った(図3)。



図2 調査地点

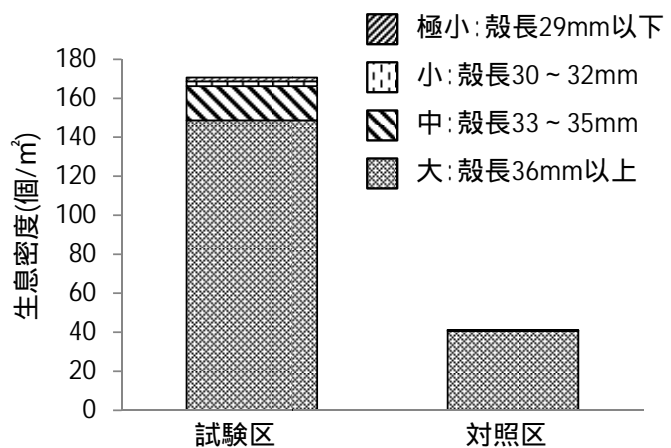


図3 2月(漁期前)の試験区と対照区の生息密度

試験区のサルボウの生息密度は、170.5個/m<sup>2</sup>であり、様々なサイズが含まれていた。サイズ別の生息密度は、直ちに漁獲可能な大サイズが8割以上を占めていたが、今後の漁獲対象として期待できる中サイズ以下も多くみられた。

一方、対照区は、41.0 個/m<sup>2</sup>と、試験区の1/4以下であった。サイズは、ほぼ大サイズのみであり、これより小さいサイズはほとんど確認されなかった。

このことから、輪作を行っている漁場は、通常の操業を行う漁場に比べサルボウを安定的に漁獲できることが示唆された。

[課題・問題点]

今回の結果は、単年の結果であるために、さらにデータの蓄積が必要である。

[今後の対応]

H28 年度も継続して調査を実施しサルボウ養殖業者で構成されるサルボウ協議会の今後の活動の指標とする。

[その他]

研究期間：平成 27 年

研究担当者：普及担当 津城啓子，堀 恭子，山口 聖